

第17回 ちゅうでん教育振興助成（平成29年度）

報告書資料 一般 - 57

学校名・団体名	豊橋市立多米小学校
HPアドレス	http://www.tame-e.toyohashi.ed.jp
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	グローバルスタンダードなユニバーサルデザインの整備
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>○外国籍児童の特別支援学級への入級希望者の増加。日本への定住化が進み、特別支援教育のよさを外国籍児童の保護者が理解し始めたために、今後もその傾向が強まることが予想される。日本語がしゃべれない、わからない外国籍の特別支援学級の児童へのよりよい支援の確立は喫緊の課題である。日本語が理解できないことや発達障害の疑いから保育園や幼稚園へ通えなかった児童がいる。日本語も母語（ポルトガル語）も語彙が少なく生活経験の乏しい児童に対して、子どもたちの困り感を知り、子どもの発達段階や特性を捉えた中できめ細やかな日常生活指導を行う必要性が高まっている。そのためにも「色」「ことば」を改善の視点としたよりよい支援のあり方を探っていきたい。</p>	

活動の概要

日本語の不得手な特別支援学級の外国籍児童に自立支援へのアプローチを行った。

「色でわかる」日常生活指導指導 (2・3年)

着替え、クールダウン、リラックス等生活のスペースを色分けし、色を使って児童が生活場면을意識できるようにする。

「ことばを身近に」国語科指導 (2・3年)

カードを使って語彙を増やしながらか学校生活の流れにそって日本語を使えるようにする。

活動の内容

1 「色でわかる」教室環境の整備 (9月)

着替えの場所・クールダウンの場所をマットの色で区別した。着替えの場所 (青) クールダウンの場所 (水色) として活用した。(写真1・2参照) 着替えの時には、活動に集中できるように、衝立も使用した。周りの様子が気になり、目についたものを触っていたA児であったが、周りからの情報を遮断することで、短時間で着替えができるようになった。

また、ジャンピングマットは、朝、登校してからの活動に取り入れた。(写真3参照) 平衡感覚にアンバランスさを抱えている子は、自己刺激行動として、ふらふら揺れたりジャンプを繰り返す様子が見られたりする。さらに平衡感覚につまずきがあると、視線の動きや姿勢が安定しないため、学習に集中できないこともある。普段からジャンプをしたり、目の前で手をひらひらさせていたりする行動がA児にも見られたため、平衡感覚が鈍感であると判断しジャンピングマットでの活動を取り入れた。この活動を取り入れたことで、授業中、教室から出たりしていたA児も、教室内にとどまることができるようになり、椅子に座って学習に取り組める時間も大幅に増えた。また、休み時間にも教室内で過ごすことが多くなった。

2 「ことばを身近に」好きな食べ物を言おう (10月)

⇒「買い物にいこう」(11月) <生活単元学習>

イラスト付きのカードを使って好きな食べ物を発表する授業を行った。最初は、なかなか進んでカードを選ぼうとしなかった。また、口に出すとことばが不明瞭になることが多かった。しかし、実際に買い物に行くことがわかると、自分が買いたいものを友達と競って選ぶようになり、教師に伝えようとするようになった。自分のしゃべった食べ物が教師に正しく伝わり○をもらえると、何度も繰り返してしゃべる姿がA児にも見られた。

3 「ことばを身近に」好きな食べ物を言おう (1月)

日本語がしゃべれないB児が転入してきた。2年生だが昨年度は、数日しか登校できておらず、給食もごはんしか食べられないという申し送りがあった。ことばの練習はA児と同様に一番興味を示した食べ物に焦点をあてた。(写真4参照) B児は、「ラーメン」「ぎょうざ」のカードが好きで、何度も音声を聞く姿が見られた。音声を聞いた後に繰り返し発音する姿も見られた。自分の好きな食べ物で、母国語とほぼ同じ発音である「アイスクリーム」「チョコレート」などはすぐに言うことができた。イラストがあることで、B児は好きなカードを選ぶことができた。また、そのカードを学級の友達にも見せて発音する姿が見られた。(写真5参照) B児が異なる発音をしたときには、友達が発音を教える姿も見られた。また、日本人の子たちも、自分の好きな食べ物を選び、それをB児に見せ、紹介する場面もあった。アクトカードを活用することで、B児が日本人の子とコミュニケーションをとるために大いに役立った。

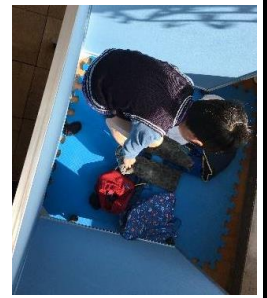
成果と今後の課題

○ 着替えやクールダウン、脱力(リラックス)タイムを行う場所などを色分けし黒板にも明記するようしたことで先を見通すことができるようになり活動がスムーズになった。

○ 絵やカードを使ったことで子どもたちは具体的なイメージをつかみ、日本語を聞いて理解することができるようになった。また、生活にねざした内容を取り入れたために積極的に活用することができるようになった。

○ 教師や子どもがカードや色を使って伝え合う場面が増え、トラブルに至る場面が減少した。

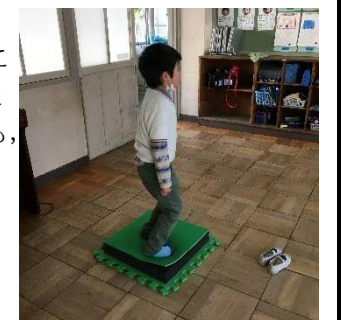
▲ 効果的な支援については普通学級へもさらに伝えていきたい。



【写真1】



【写真2】



【写真3】



【写真4】



【写真5】